

# IIBC NEWSLETTER

Oct 2016  
Vol.  
**130**

特集「TOEIC® テスト名称変更」

## 「TOEIC® テスト」および 「TOEIC® Speaking & Writing」の名称を変更

### テスト名称を変更し、新ブランド「TOEIC® Tests」を導入

国際ビジネスコミュニケーション協会（IIBC）は、2016年8月5日、これまで英語のListening（聞く）とReading（読む）の2技能を測定するテストとして実施していた「TOEIC®テスト」の名称を「TOEIC® Listening & Reading Test」に、Speaking（話す）とWriting（書く）の2技能を測定するテストの「TOEIC® Speaking & Writing」を「TOEIC® Speaking & Writing Tests」に、それぞれ名称を変更しました。名称変更によるテスト内容の変更はありません。同時に、この両テストを総称するテストブランドとして「TOEIC® Tests」を新たに設けました。

さらに、TOEIC Testsに初・中級レベルの英語能力を評価するTOEIC Bridge® Testを加え、「TOEIC® Program」と総称しています。TOEIC Programは、Educational Testing Service（ETS）により、英語を母国語としない人たちを対象に、ビジネスや日常生活のシーンで使われる英語のコミュニケーション能力を測るテスト

というコンセプトで作られています。TOEIC Programは、2015年度に世界で約150カ国700万人、日本では277万9300人が受験しており、英語能力測定のグローバルスタンダードとなっています。

TOEIC Bridge Testは「聞く」「読む」の2技能を測定するテストですが、TOEIC Listening & Reading Testが2時間200問でスコアは10点から990点なのに対し、TOEIC Bridge Testは1時間100問で、スコアは20点から180点となっており、英語学習初・中級者を対象とした、日常生活で生きる“英語で聞く・読む能力”を測定するテストです。

この度の名称変更により、TOEIC Programには「聞く」「読む」「話す」「書く」という英語4技能を測るテストがあり、さらに英語学習初・中級者のためのテストを含めた幅広いラインアップがあることをより多くの方々に知っていただきたいと考えています。

#### 個別テスト正式名称

変更前 (2016年8月4日迄)	変更後 (2016年8月5日以降)	
	正式名称	短縮名称
TOEIC® テスト	TOEIC® Listening & Reading Test	TOEIC® L&R
TOEIC® Speaking & Writing	TOEIC® Speaking & Writing Tests	TOEIC® S&W
TOEIC® Speaking	TOEIC® Speaking Test	TOEIC® Speaking
TOEIC® Writing	TOEIC® Writing Test	TOEIC® Writing
TOEIC Bridge®	TOEIC Bridge® Test	—

#### INDEX

- P.1 特集「TOEIC®テスト名称変更」  
「TOEIC® テスト」および  
「TOEIC® S&W」の名称を変更
- P.4 TOEIC® L&R 受験者アンケート
- P.6 TOEIC® S&W 受験者インタビュー
- P.7 大学での最新の取り組み ～東京大学理学部化学科～  
東京大学理学系研究科副研究科長 山内薫先生に聞く
- P.10 IIBC TOPICS

# 英語4技能を効果的に測定できるTOEIC® Tests

近年、わが国ではさらなるグローバル化に向けて、英語4技能測定への関心が高まっています。

1979年にスタートしたTOEIC Listening & Reading Test（以下、TOEIC L&R）は、日常生活やグローバルビジネスに生きる“英語で聞く・読む能力”を測定するテストです。コミュニケーションのベースとなる、相手の意図を正しく理解する能力を測定するだけでなく、チャット形式など現代のコミュニケーション方法にも対応するなど、より実践的な内容となっています。

そして2007年にスタートしたTOEIC Speaking & Writing Tests（以下、TOEIC S&W）は、日常生活やグローバルビジネスに生きる“英語で話す・書く能力”を測定するテストです。ビジネスミーティングやプレゼンテーション、メールのやり取りなど、昨今、

ますます関心が高まっている、話す・書くという、発信力を測定することができます。

TOEIC L&RとTOEIC S&Wの2つのテストにより、「聞く」、「読む」、「話す」、「書く」という4つの技能を効果的に測定することができます。

4技能測定への関心の高まりとともに、TOEIC Testsの受験者は広がりを見せています。2015年度には、「聞く」「読む」技能を測定するTOEIC L&Rは、日本国内で3400団体、255万6000人、TOEIC S&Wは380団体、2万6300人と、両テストとも、過去最高の受験者数となっています。

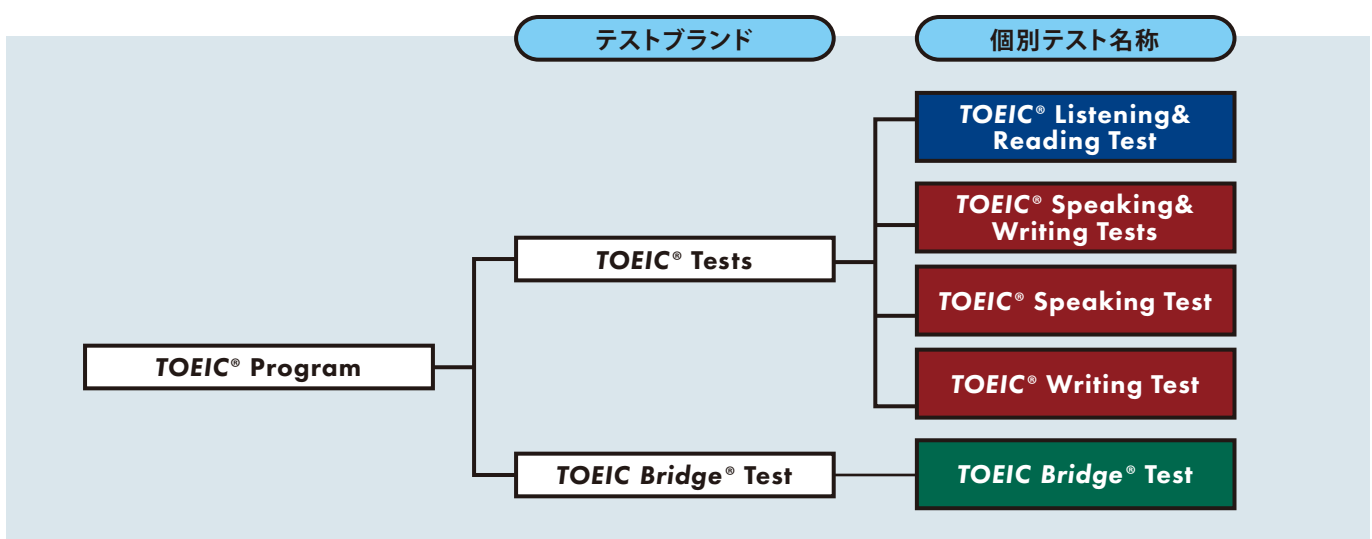
## TOEIC® Program 受験者数の推移

（単位：人）

	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
TOEIC® Listening & Reading Test	2,270,000	2,304,000	2,361,000	2,400,000	2,556,000
TOEIC® Speaking & Writing Tests※	10,700	11,100	14,700	24,000	26,300
TOEIC Bridge® Test	213,000	209,000	210,000	205,000	197,000
TOEIC® Program 総受験者数	2,493,700	2,524,100	2,585,700	2,629,000	2,779,300

※TOEIC S&W、TOEIC Speaking、TOEIC Writing（IPテストのみ提供）を合算した人数

## TOEIC® Program 体系図



※TOEIC L&R、TOEIC S&Wの同日受験はできません。

※TOEIC Speakingは公開テスト、IPテストともに受験が可能です。

※TOEIC Writingは、IPテストのみの受験となります。

## 活用が広がるTOEIC® Speaking & Writing Tests

現在、TOEIC L&R は企業での英語研修の効果測定や海外派遣要員の選抜、昇進・昇格の要件などとして多く利用されており、さらにTOEIC S&W についても、同様に利用される企業が徐々に増えてきています。

高校や大学でも、授業や留学の効果測定、成績評価、就職活動のアピール材料としてTOEIC S&W を導入する学校が増えています。最近ではスーパーグローバルハイスクール (SGH) やスーパーグローバル大学 (SGU) など、英語に力を入れている高校・大学でもTOEIC S&W をご活用いただいています。2015年度は、TOEIC S&W を利用している380の団体のうち、企業は250社、学校は130校となっています。

また、受験方法も幅広くなっています。TOEIC S&W は、Speaking Testが20分、Writing Testが60分、合計80分間のテストです。これまではセットでの受験のみの提供でしたが、2016年1月からは公開テストでも、「TOEIC® Speaking Test」だけでも受験が可能になりました。また、団体特別受験制度 (IP: Institutional Program 以下、IPテスト) では、「TOEIC Speaking Test」と「TOEIC Writing Test」を別々に受験することができるなど、受験の方法も広がっています。

## 英語の発信力を高めて、世界で活躍できる人材の育成へ

一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会 常務理事 山下雄士

1979年にTOEICテストとしてスタートしたTOEIC Listening & Reading Testは、スコアによる評価や英語能力を正確に測定できる質の高さが評価され、企業・団体において広く利用され、急速に普及しました。2007年からは英語で話す・書くといった能動的な能力を測定するTOEIC Speaking & Writing Testsがスタートし、こちらも順調に受験者数は増えています。しかしながら、TOEICといえば聞く・読むを測定するテストであるというイメージが強く、話す・書く能力を測定するテストも存在していることを知っている人はそう多くはありません。

話す能力を測るテストとしては、1980年には「TOEIC® LPI※」というインタビューテストがありました。これはインタビュアーとface to faceのテストですので、受験者が限られていました。その後、コンピュータ技術の進歩などにより、2007年からTOEIC Speaking & Writing Tests がスタートし、幅広くご利用いただけるようになりました。

2015年度にはTOEIC Listening & Reading Testは255万6000人もの方々に受験いただいています。TOEIC Speaking & Writing Tests は2万6300人と、まだ約100分の1に過ぎません。近年、英語での発信力の重要性が叫ばれています。その発信力を測定するためにTOEIC Speaking & Writing Tests をより多くの方々にご利用いただきたいと思います。

日本の国際化が始まった20～30年前は、企業で英語が必要とされたのは、主に国際部に所属する人々と海外赴任をする人々でした。現在は、世界中に現地法人を持つ企業の経理課の人たちが世界各国の経理担当者と、月々の経営状況を確認するために英語でやりとりをしたり、また、グローバルなIT系企業では、以前は日本とアメリカ、日本とシンガポールなど1つの海外拠点やパートナーとの1対1のやりとりでしたが、今は世界各国のパートナーたちが同時にそれぞれの地域のなまりのある英語で会議をするというシーンも増えています。

今後、少子高齢化が進むにつれて国内市場が縮小し、日本企業

はもっと世界に出ていかなければならなくなります。その時のコミュニケーションツールは間違いなく英語が中心になるでしょう。また、これまではパッシブ (受動的) スキルを磨くことが重視されていましたが、これから世界の中で日本人のプレゼンスを上げていくためには、プロダクティブ (能動的) スキルが重要となります。TOEIC Speaking & Writing Testsを活用することで英語での発信力を高めて、グローバル経済の中での競争力を強化してほしいと思います。

英語学習においては、聞く・読む能力の習得は、本やインターネットなどを利用することで、1人でも学習することができますが、話す・書く能力の学習は1人では難しく、英語でのコミュニケーションの機会も少ないのが現状です。そのため当協会では、実際に英語で話せる「場所」や「機会」を提供するため、イベントなどを積極的に実施しています。2016年2月には、六本木ヒルズカフェにて、「英語を話す場」を提供する「TOEIC ENGLISH CAFÉ」を期間限定でオープン、同年3月には東京都港区のアメリカンクラブにて、一般社団法人日米協会 (AJS) との共催で、両団体の参加者が英語で交流するイベントを実施しています。TOEIC Programの提供だけでなく、英語を話す場、実践的にコミュニケーションスキルを磨く機会を提供することで、将来活躍するグローバル人材の育成につなげていきたいと考えています。

※TOEIC LPIは2010年3月をもって終了しました。



# TOEIC® Listening & Reading Test がより実践的なテストに

TOEIC® Listening & Reading Test (以下、TOEIC® L&R) は、2016年5月29日実施の第210回公開テストより、出題形式を一部変更いたしました。これにより、現在使われている英語のコミュニケーションを反映した、より実践的なテストとなりました。今回の出題形式変更の概略と、実際にテストを受験された方々にお答えいただいたアンケート調査の結果をご報告します。

## 時代の変化に合わせてさまざまな新形式問題を出題

グローバルビジネスにおける英語のコミュニケーションは、時代とともに変化しています。近年、スマートフォンやタブレットなど新たな通信手段の普及に伴い、英語の使い方やコミュニケーション形式が大きく変化しています。テスト問題もこのような変化に合わせて、見直していく必要があります。

TOEIC L&Rは今日使われている英語を反映し、受験者の英語スキルを的確に測定するテストであり続けるために、今年5月の公開テストより出題形式を一部変更しました(※)。

チャット形式のコミュニケーションやビデオ会議などで見られる複数の人々による会話の場面、また、手元の資料を照らし合わせながらの会話など、この10年間に普及したコミュニケーション形式を問題に取り入れた新形式問題を導入しています。

なお、出題形式が変更されても、テストのクオリティと難易度はこれまでと同等で、変更後のTOEIC L&Rのスコアも、変更前のテストのスコアと比較が可能です。

## 出題形式変更の概要

### 変更前

Part	name of each part	パート名	問題数
<b>リスニングセッション (約45分間)</b>			
1	Photographs	写真描写問題	10
2	Question-Response	応答問題	30
3	Conversations	会話問題	30 (3×10)
4	Talks	説明文問題	30 (3×10)
<b>リーディングセッション (75分間)</b>			
5	Incomplete Sentences	短文穴埋め問題	40
6	Text Completion	長文穴埋め問題	12 (3×4)
7	Single passages Double passages	1つの文書 2つの文書	28 20

### 変更後

Part	name of each part	パート名	問題数
<b>リスニングセッション (約45分間)</b>			
1	Photographs	写真描写問題	6
2	Question-Response	応答問題	25
3	Conversations (with and without a visual image)	会話問題	39 (3×13)
4	Talks (with and without a visual image)	説明文問題	30 (3×10)
<b>リーディングセッション (75分間)</b>			
5	Incomplete Sentences	短文穴埋め問題	30
6	Text Completion	長文穴埋め問題	16 (4×4)
7	Single passages Multiple passages	1つの文書 複数の文書	29 25

※赤字の部分が変更点

(※) 企業・団体、学校における団体特別受験制度 (IP: Institutional Program) については、2017年4月導入を予定しています。

## 全体の約7割の方が、より実践的なテスト内容となったことを実感

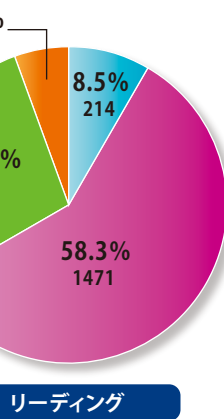
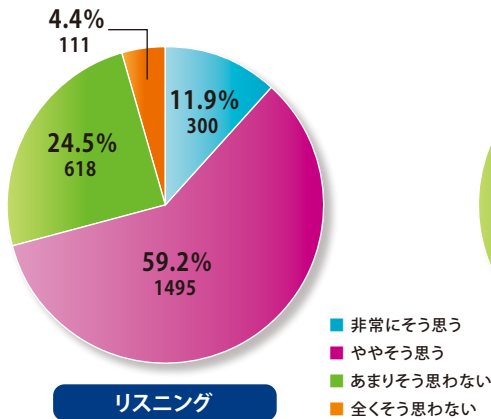
IIBCでは、5月のTOEIC L&Rを受験した方々にアンケートを実施し、新形式のテストの印象について聞きました。

まず、新形式問題の導入により、「より現実に即した状況や設定が再現されたテスト内容になったと思いますか」との質問に対し、「非常にそう思う」と「ややそう思う」と回答した方が、リスニング・テストで71.1%、リーディング・テストでは66.8%を占め、約7割

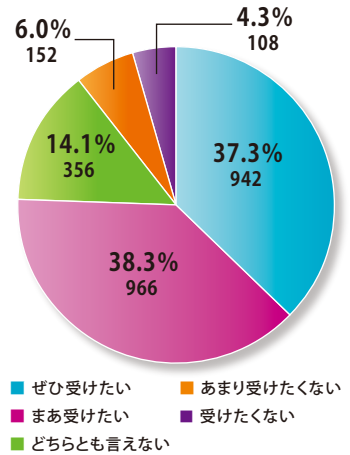
の方が問題形式の一部変更によって、より実践的なテストとなったと感じていました。

また、「『新形式』のTOEIC L&Rをまた受けたいと思いますか?」との質問に対しては、「ぜひ受けたい」(37.3%)と「まあ受けたい」(38.3%)を合わせて、75.6%の人がまた受けたいという意向を示していました。

従来に比べて、より現実に即した状況や設定が再現されたテスト内容になったと思いますか?



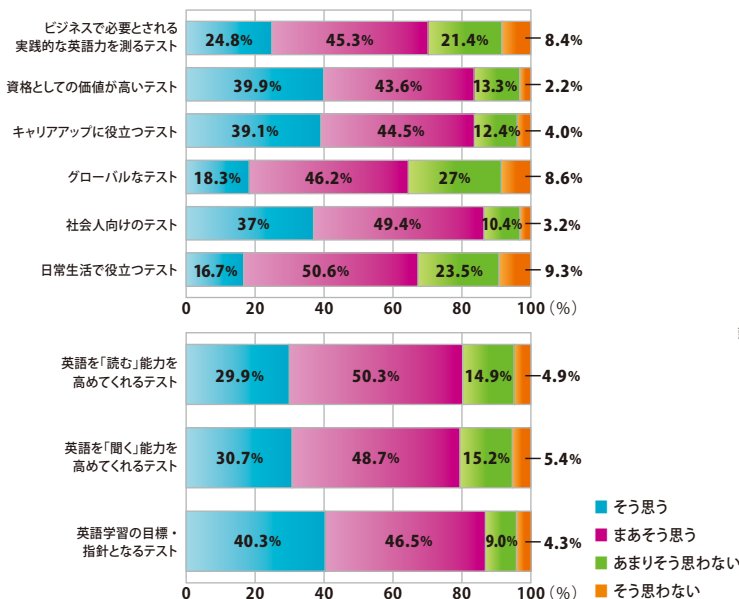
「新形式」のTOEIC L&Rをまた受けたいと思いますか?



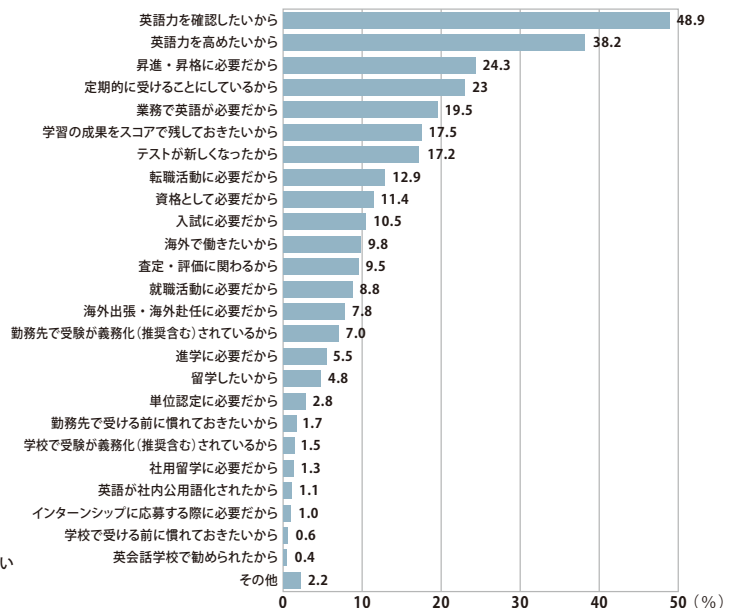
「新形式のTOEIC L&Rについてどのように感じたか」との質問に対し、「そう思う」「まあそう思う」の合計が多かった項目は、「社会人向けのテスト」の86.4%、「キャリアアップに役立つテスト」の83.6%、そして「資格としての価値が高いテスト」の83.5%で、次に「ビジネスで必要とされる実践的な英語力を測るテスト」が70.1%となっており、ビジネスにおけるキャリアアップや実践的な英語力の確認に役立つという回答が多く目立ちました。

英語学習に役立てるという観点では、全体の約8割の方が、「聞く」「読む」それぞれの能力を“高めてくれるテスト”と回答しています。また、受験した理由に対する質問でも、「英語力を確認したいから」が48.9%と一番多く、次に「英語力を高めたいから」が38.2%と、自己の英語学習に役立てたいという理由で受験している方が多いという結果になっています。

あなたは「新形式」のTOEIC L&Rをご受験いただいて、どのように感じましたか。各項目であてはまるものを1つずつお選びください。



あなたが「新形式」のTOEIC L&Rを受験した理由はどういうことでしたか? あてはまるものを全てお答えください。



【アンケート概要】

アンケート実施時期：2016年6月22日～6月30日  
 アンケート実施方法：Web上でのアンケート  
 有効回答数：2,524人

アンケート対象者：2016年5月29日の第210回TOEIC L&R公開テスト(新形式問題導入後、第1回目)の受験者で、かつ2016年1月、3月、4月のいずれかのTOEIC L&R公開テストを受験している方

## TOEIC® S&W 受験者インタビュー

### 実務と連動したテスト内容がスキルアップに役立つ

英語学習における4技能測定に関心が集まる中で、英語での発信力を高める、英語で話す力、書く力が注目されています。TOEIC® Speaking & Writing Tests(以下、TOEIC® S&W)は、プレゼンテーションや会議、商談、交渉など、実際のビジネスシーンで活かせる話す力、書く力を測ることができる世界共通のテストです。TOEIC S&Wは自分自身の英語力がスコアで確認できるだけでなく、発信力を磨くツールのひとつとして受験されています。最近では就職や転職、組織の中での配属の指標として活用が広がっており、テストに向けて学習した内容は、そのままビジネスでのコミュニケーション場面においても役立っています。

今回は TOEIC S&W 受験者の方に、受験の感想と TOEIC S&W の活用法についてうかがいました。



市川基寿さん フリーアナウンサー

TOEIC Tests Score  
L&R 870 / S 120 / W 150

#### 英語での発信力を高め、仕事の幅を広げたい

フリーアナウンサーの私は、英語の「話す」、「書く」力を磨いて、将来、外国人のインタビューなどへと仕事の幅を広げたいと考えていました。英語には少し自信がりましたが、外国人に道を聞かれて満足な対応ができず、発信力の弱さを痛感。発信力を強化するためTOEIC S&Wを受験しました。受験と学習を続ける中で、流暢とまではいきませんが、少しは話せるようになったり、ライティングでも、今までワンセンテンスで止まっていたところが、さらにもう一文を書けるようになったりと一歩ずつですが手応えを感じています。間違えを恐れずにアウトプットすることが大事で、表現を試行錯誤するうちに自然と洗練されてきます。テスト内容もいろいろな角度からアウトプットを試されてやり甲斐があり、難易度も適切に感じます。目標は、S&W共に180点を目指してがんばっています。



木野嵩広さん 食品メーカー勤務

TOEIC Tests Score  
L&R 735 / S 130 / W 140

#### 「話す」、「書く」を強化して、実践的なコミュニケーション力を磨く

TOEIC L&Rで目標としていた700点を取れるようになりましたが、勉強しているのは「読む」、「聞く」だけで、「話す」と「書く」がおろそかになっていることに気づき、TOEIC S&Wを受けました。TOEIC S&Wの良い点は、話す、書く力をスコアで測れることです。勤めている会社は海外にも工場があり、ゆくゆくは海外勤務もしてみたいと思っていたので、スコアは社内でのアピールの材料にもなると思います。実際のコミュニケーションでは、「話す」、「書く」は非常に重要です。実践的な英語を身に付ける意味でもTOEIC S&Wに挑戦することをおすすめします。



村上雅寛さん 製薬会社勤務

TOEIC Tests Score  
L&R 825 / S 150 / W 140

#### TOEIC S&Wはまさに活きた英語を学べるテスト

4年前、仕事で海外の方を招いたパーティーで、何もしゃべれずに本当につらい思いをしました。さらに最近は海外と技術情報を交換する会議などがあり、「聞く」だけでなく、「話す」スキルも必要になっています。そこで、自分の話す能力を知りたいと思いTOEIC S&Wを受けました。定期的に受け、点数が悪い時は、発奮して次へのパワーにしています。会話では、疑問形で問いかけてみるなど、いろいろなコミュニケーションのとり方があります。テストを受けて、自分の弱い部分を確認して、それを強化することで、さまざまなコミュニケーションのスキルが身に付いてきました。TOEIC S&Wはまさに活きた英語を学べるテストだと思います。



足立伸之さん 情報サービス会社勤務

TOEIC Tests Score  
L&R 690 / S 90 / W 150

#### 弱点であるスピーキング力克服のために最適なテスト

今やゲーム開発は世界同時開発など、海外とのやりとりが日常的です。職場で英語を使う機会はありますが、英語で話すことに苦手意識があり、実践的な内容であるTOEIC S&Wを受けよう決めました。受験してみると、相手の言うことは理解できたのですが、簡単な単語ですら思い出せず、伝えたい内容を返すことができないことがわかりました。会話はリズムが大切だと痛感し、即答力を鍛える必要性を感じました。勉強して学んだ内容を実務でも使えるようになると、スコアも上がってきて、それがモチベーションアップにつながり、また、次の課題を見つけることができるので、「最強」のテストだと思います。今はこのような方法でコミュニケーション力を磨いて、将来、海外に長期滞在して仕事をしてみたいと思うようになりました。

大学での最新の取り組み ～東京大学理学部化学科～

# 化学科の全講義英語化で、 将来の日本を担うグローバル人材を育成

東京大学理学系研究科副研究科長 山内 薫先生に聞く

東京大学理学部化学科では、2014年10月より、海外の大学から留学生を学部編入生として受け入れるグローバルサイエンスコース（GSC）が新設され、専門科目の授業がすべて英語化されました。GSCでは、留学生と日本人学生がともに、英語で行われる講義を受講しています。英語化に踏み切った背景とその現状について、理学系研究科副研究科長 山内 薫先生にお話を伺いました。

## 世界で活躍できる人材の 育成を目指す

——今回、授業の英語化に踏み切った理由を教えてください。

人類は自然科学を通じて、自然界の仕組みを解明し、技術を進歩させて暮らしを豊かにしてきました。言うまでもなく、自然科学に国境はなく、自然科学分野の議論は、世界各国の研究者が共通に使える言語、すなわち英語で行われています。日本の研究者が世界の第一線で活躍する研究者と交流し、国際的に活躍していくためには、英語で自然科学を語り、議論できなくてはなりません。

そのためには、普段から英語に接することが必要で、単に英語を語学として学ぶのではなく、いつも自分たちが取り組んでいるテーマを英語で考え、そして議論することが求められます。東京大学理学部では、将来国際的に活躍することができるグローバル人材の育成を目指して、2014年10月にグローバルサイエンスコース（GSC）※を新設し、その第一歩として、化学科の講義（学部3年次以降）をすべて英語化しました。

※グローバルサイエンスコース（GSC）  
<http://www.s.u-tokyo.ac.jp/GSC/>

東京大学のGSCでは、海外の大学の学部課程を2年以上修めた外国人学生が、東京大学理学部3年次に編入学生として入学し、理学部への内部進学生とともに講義を受

講します。編入学生となるための応募条件は、①海外大学の学部課程に2年以上在学し、最低62単位を取得していること、②理学に対する基礎知識を持っていること、③英語が堪能であることとなっています。GSCでは、講義を英語で開講すると同時に、編入学生に毎月15万円の奨学金を支給し、さらに、宿舎も無償で提供しています。

## 海外からの留学生と日本人学生の 相乗効果が生まれる環境づくり

——グローバルサイエンスコース（GSC）を設置された意図は何ですか。

今、日本は少子化により大学生の数が年々減っており、このまま少子化が進んでしまうと、将来を担う人材が不足してしまいます。学術分野においても、現在の高いレベルの研究を維持し、それをさらに発展させて行くことを考えると、少子化は深刻な問題です。少子化に歯止めをかける努力を続ける一方で、海外から優秀な人材を受け入れることができる、国際的な環境を整えることが必要です。

日本の大学に海外から学生を受け入れるとき、まず、問題となるのが言語です。講義が英語で開講されなければ、海外の学生にとって、その大学は留学先の候補から外れてしまいます。そして、次に問題となるのは日本で生活するための経済的な支援です。GSCでは、講義を英語で行うとともに、編入学生に奨学金を支給するなど



### profile

1957年東京都出身。1981年東京大学理学部化学科卒業。1997年4月より東京大学大学院理学系研究科化学専攻教授。物理化学、特に、強光子場科学、レーザー分光学、化学反応動力学を専門分野としている。日本分光論文賞（1989年）、日本化学会進歩賞（1991年）、レーザー学会論文賞（解説部門）（2008年）、第67回日本化学会賞（2015年）、第7回分子科学会賞（2016年）などを受賞。

経済的支援を行い、留学生にとつてのこの2つの問題を軽減しました。

GSCは、その発足当初から、高い学術・教育レベルを持つ東京大学を卒業できる魅力的なコースとして海外の大学生に受け止められ、初年度の2014年の秋には中国の大学から6名、アメリカの大学から1名を、そして、2015年の秋には、アメリカの大学から2名、インドの大学から2名、中国の大学から1名を受け入れました。皆、いずれも非常に優秀で勉学意欲も高い学生たちばかりでした。GSCへの編入には年々応募者が増えています。今、国際的な認知度が高まっていますので、応募者はこれから更に増えて行くものと思います。

編入学生たちは、覚悟を決めて日本に来ていますので、第1期、第2期の編入学



まずは、日本における大学教育の国際化を推進すべきであると考えています。日本国内において、授業などで日常的に英語を使う環境が整い、自然に英語で議論できるようになれば、海外で学びたいという学生の数も増えて行くでしょう。GSCはそのような考え方から、必然的に始まったものです。

私たちの取り組みは、日本における英語教育をどのように展開すべきか、それをグローバル人材の育成に如何に役立てて行くのかという問題を議論する時の参考になるものと思います。

## 長い準備段階を経て英語化を実現

—— 英語化の経緯を教えてください。

東京大学大学院理学系研究科化学専攻では、14年前から、英語で議論ができるグローバルな人材育成のため、さまざまな取り組みをしてきました。まず、2002年から大学院博士課程1年次の大学院生のために、実践的な英語プログラム「Academic English for Chemistry (AEC)」を開講しました。AECでは、語学としての英語を専門とする他大学のネイティブスピーカーの先生を招いて講義をしていただき、学生たちが、英語で話すこと、英語を聞き取ること、英語で文章を書くことに慣れるようになることに主眼を置きました。その後、AECは、大学院修士課程の学生にも対象を広げました。そのような背景の下、化学専攻では、8年前から大学院修士課程の講義をすべて英語で開講することになりました。なお、現在AECは、大学院修士1年次の学生、化学科の学部3年次、4年次の学生、そして、化学科進学に内定した2年次の学生を対象として開講されています。化学専攻では、このような長い準備期間を経て、化学科の学部すべての講義の英語化に至ったのです。

## 案ずるより先に、始めること

—— そして次に学部の講義の英語化に着手されたのですか。

東京大学理学部が提案したGSCの構想

が、グローバル人材の育成に資するプログラムとして文部科学省に評価され、2014年度から5年間のプロジェクトとしてGSCの予算が確保されました。そして、英語による講義の準備が整っていたため、化学科からGSCが始まり、2014年から、化学科の学部3年次、4年次の講義を英語で行うことになりました。

この学部講義の英語化に対しては、さまざまな意見が寄せられました。「講義をすべて英語にすると、日本人学生の理解が浅くなる」とか、「日本語でしか表現できない内容もあり、英語で講義ができる分野は限定されるのではないか」などの指摘もありました。このような心配も理解できることですが、心配ばかりしては前に進めません。

講義は英語を用いて行われていますが、補助的に日本語による説明も行われ、編入学生だけでなく内部進学生が十分に講義の内容を理解するように工夫されています。内部進学生たちも英語の講義にすぐに慣れ、講義中に英語で質問をしてくれることもしばしばです。講義が終わると、編入学生も内部進学生も、英語や日本語で質問をしに教壇に来てくれます。東京大学の学部の講義の時間は、昨年度から、それまでの90分から105分へと長くなりましたが、学生たちが積極的に受講してくれるので、講義時間が長くなったようには感じませんでした。

## 早い時期から、英語が役に立つツールであると知ることが大事

—— 学部の講義の英語化はどのような影響がありましたか。

東京大学では、学部1年次、2年次の学生たちは教養学部生となります。理学部進学生の多くは、理科I類、理科II類の学生ですが、学部後期課程の進学先は、学生たちの希望と最初の1年と半年の間の成績で決まります。学生たちの中には、英語の授業についていけないのか、英語で化学を理解できるのかなどと心配する学生もいると思います。実際、化学科では講義が英語なので化学科を敬遠する、つまり、進学先には選ばないという学生もいるようですが、一方、英語で化学を勉強できる環境に魅力を感じ、化学科を進学先として選ぶ学生もいます。

日本では、学生たちは大学に入る前に中

生を見る限り、勉学に対して、非常に熱心であると感じました。編入学生たちは、日本人学生よりも英語については慣れていることもあり、私が担当している量子化学の講義では、同じ講義を受け始めた最初の学期は、編入学生たちの試験の点の方がやや高いという傾向がありました。しかし、次の学期になると、ほとんど差がなくなりました。また、編入学生たちは、語学としての日本語の講義を1学期間勉強し、最低限の日本語能力を得てから、日本人学生と一緒に講義を受け始めます。そのため、クラスの中では、英語だけでなく日本語を使って編入学生と内部進学生が交流していて、お互いに良い影響を与えています。日本人の学生にとっても、日本にいながらにして英語で専門科目を学ぶ機会が得られるだけでなく、外国人学生と同じ教室で一緒に勉強することによって、良い刺激を受けることができるというメリットがあるのです。

グローバル人材の育成のためには、日本人学生に海外留学の経験をさせることも一つの方策であると思います。しかし、近年は、日本人学生は海外に留学したがない傾向があるようです。その背後には、やはり語学の問題があるように思います。英語に自信がないので留学などしなくて済めばそれに越したことはない、という考えを持つのは無理からぬことです。私は、



学校・高等学校の6年間という長い期間、英語を勉強しています。それにもかかわらず、大学に入ってから英語で授業を受けるとなると、学生たちの多くが不安を抱えてしまいます。それは、自分の関心がある事柄について、英語で聞いたり、英語で話したりする経験を十分にすることがないからではないかと思えます。長い期間英語を勉強しているにもかかわらず英語が身に付かない一つの理由は、英語が英語の授業の中でしか使われないことにあると思えます。つまり、英語の授業でしか使われない言語に、その価値を見出して、慣れなさいと言っても、学生たちには理解ができないのではないのでしょうか。もし、国語、算数、理科、社会などの科目において、少しでも英語が使われていれば、英語が如何に役に立つかを実感できるに違いありません。英語がツールとして役に立つのだということが分かれば、学生たちが英語を学ぶ姿勢も変わって来るのではないかと思えます。

欧州の英語を母国語としない国々のトップクラスの大学では、大学院教育を英語で行っているところは珍しくありませんが、学部教育で講義を英語で行っているところは、少ないのではないかと思えます。欧州の場合、どの国の言語でも、その構造が英語と大きくは変わらないため、大学院に入ってから英語で講義が行われるようになって、学生たちが順応することがそれ程難しくないという事情があると思えます。しかし、日本語の場合は、欧米の言語とは大きく構造が異なるため、学生たちは、なるべく早い時期から英語に慣れていくことが必要ではないかと思えます。日本人の大学生たちが、学部のころから英語に慣れて、欧米のトップ大学の大学院も将来の選択肢の一つとして考えられるようになって欲しいと思えます。

## 国際的な場で議論できることが重要

— 科学者にとって英語は、どのような意味がありますか。

科学分野での国際的な公用語は英語です。国際的な場での研究発表や議論は、すべて英語で行われます。科学の分野で学術のコミュニティに貢献するためには、英語で学術論文を書いて出版しなければなりませんので、英語で論文を書く技術を身に付けなければなりません。しかし、それだけではありません。科学の分野では、研究者どうしが議論を重ね、理解を深めていくのが日常です。そして、国際会議は、自らの研究を単に発表する場としてだけでなく、自分の研究内容や、他の研究グループの研究内容について、他の研究者と議論をする場として、その価値があるのです。したがって、国際会議などの研究者の交流の場で、英語が障壁となってしまっ、議論が深まらなかったとしたら、それはとても残念なことです。

そのような国際的な場で重要なことは、間違いのない正確な英語を話すことではなく、議論の流れをつかみ、その中で自分の考えをしっかりと述べ、学問を深める場に自らが参加し貢献をしていくことでしょう。しかしながら、このような技術は、普段から英語を使っていないと身に付かないものです。これからの教育に求められていることは、日常的に英語を使える環境を学生たちに提供していくことであると思えます。GSCはそのような要求への一つの回答を与えたものと言えるでしょう。環境さえ用意すれば、学生たちはそれを最大限活用してくれます。今GSCで化学科の学生たちがそれを実証してくれています。

## 学生たちに国際的な環境を提供することが重要

— 今後、GSCはどのように展開していきますか。

今や日本の大学で、講義をすべて英語で行うコースは決して珍しいものではないと思えます。しかし、東京大学理学部化学科のような既存の学部学科に編入という形で留学生を受け入れ、授業を英語にして日本人学生とともに学ばせる取り組みは希ではないかと思えます。これは、留学生と日本人学生の「共学方式」による学部教育です。日本人学生と留学生との会話も、普段から英語で行われ、日本人学生が自然に英語を使う機会が増え、日本人学生に学部時代から国際的な環境が提供されます。また、勉学意欲が高い留学生と同じ教室で学ぶことは、日本人学生にとって、良い刺激です。私は、この環境の下で育った、編入学生と内部進学生が、将来、さまざまな分野でグローバルに活躍してくれるものと期待しています。

現在、理学部10学科のうちGSCに参加している学科は化学科だけですが、理学部の他の学科においても英語による授業の数は年々増加していくと思えます。また、日本の他の大学が、我々のGSCの取り組みを、学部教育の国際化のための参考としていただければ有り難いと思えます。

— ありがとうございます。

## 東京大学理学部化学科の概要



東京大学理学部化学科の歴史は、徳川幕府が蕃書調所の精煉方を創設した1861年まで遡ります。これは、東京大学創立（1877年）よりも古く、我が国の化学分野をリードし、学界、産業界、教育界に多くの人材を輩出してきました。現在は、物理化学、有機化学、無機・分析化学の基幹3講座、12研究室から成り立っており、広い分野の礎となる理学としての基礎化学の研究・教育を担っています。

◀ 大正5年に完成した化学東館は、本郷キャンパスの中では最古の建物であり、震災・戦災にも生き抜いて、いまなお当時の面影を残しています。なお、内部は昭和59年に改修されています。



# IIBC TOPICS

## 増回記念イベントを実施

## 沖縄・香川でTOEIC® L&R公開テストを増回

TOEIC® L&R公開テストの受験機会を増やすことを目的に、本年より新たに沖縄県と香川県において7月にTOEIC L&R公開テストを実施しました。これにより、両地域において、年6回(1月、3月、5月、7月、9月、11月)、2カ月に1回TOEIC L&R公開テストを受験できるようになりました。

実施の増回を記念し、2016年5月21日(土)に、沖縄県那覇市(沖縄産業支援センター)、6月4日(土)に香川県高松市(レクザムホール)にて、TOEIC L&R公開テスト説明会、および「使える英語の効果的習得法」講演会を開催しました。講演会は講師に千田潤一氏をお招きし、英語学習のモチベーションを



沖縄県で実施された説明会&講演会

アップさせる7つのポイントを5つのトレーニングを通じてご紹介いただきました。両会場ともに、多くの方々にお集まりいただきました。参加者の皆さんからは、「貴重な話を聞けることができました」「別の地域でもぜひ開催してほしい」といった声がよせられました。イベントを通じて、受験機会の増加を知っていただくとともに、英語学習に対するモチベーション向上のきっかけづくりになりました。

また、今回初の試みとして書店用に両地域オリジナルチラシを配布することで、より多くの方々にTOEIC L&R公開テストの受験機会の増加について知っていただく機会となりました。



## 高校生を対象に「IIBCエッセイライティングワークショップ」を大阪と東京で開催

IIBCでは、毎年、高校生を対象とした英語エッセイコンテスト「IIBCエッセイコンテスト」を開催しています。8回目となる今年のテーマは「私を変えた身近な異文化体験」です。将来世界に羽ばたく高校生皆さんに、コミュニケーションのギャップを乗り越えて、異なる文化を持つ人々とわかり合うことの大切さを見つめ、考える機会を持つことをねらいとしています。

IIBCエッセイコンテスト事務局では、本コンテストに先立ち、エッセイコンテストに参加を予定している高校生を対象に「エッセイライティングワークショップ」を2016年7月27日(水)に大阪、28日(木)に東京の2カ所で開催し、大阪14名、東京31名の高校生が参加しました。

大阪では関西学院大学のDaniel Thomas O'Keeffe氏とJeremy McMahon氏、東京では立教大学のGene Thompson氏とNerys Rees氏を講師としてお迎えしました。ワークショップは少人数のグループ形式で行われ、午前中はエッセイライティングの構成のポイント、使える表現等を学ぶ基礎知識講義、午後は実際のエッセイライティングに取り組みました。講師から個別に丁寧なアドバ

イスを受けながら、エッセイの書き方を学びました。

終了後のアンケートでは、「とても楽しく、ためになるワークショップだった。英文の書き方、文章の作り方もとてもためになった。英語で会話する時間が多かったので、いい経験になった」、「他の学校の子と関わりを持てるいい機会になった。それ以上にライティングの書き方を基礎から勉強できたのでよかった」、「教え方が丁寧でわかりやすくよかった。次はもっと発展的な内容についても知りたいなと思った」などの声をいただきました。実際にワークショップに参加した高校生からも、今年度のIIBCエッセイコンテストに応募いただきました。今後もこのような活動を通じて、一人でも多くの高校生に英語で自分の考えを書く機会を提供していきます。



講師がテーブルを回って個別にアドバイス(大阪会場)



エッセイライティングに取り組む参加者(東京会場)

## ETS 講師を招き、 Propell® Teacher Workshop for TOEIC® S&Wを開催

8月1日から6日、ETSより講師としてElizabeth Ashmore氏とAlyssa Francis氏を招へいし、Propell® Teacher Workshopを東京と大阪において計5回開催しました。

Propell®とはETSが開発した英語教育指導者向けのプログラムです。ETSは、TOEIC Programの開発・制作以外にも、英語コミュニケーションスキル向上を支援するために、それぞれのテスト内容にあわせて、英語教育指導者を対象としたWorkshopも開催しています。

今回は、TOEIC L&RならびにTOEIC S&WのPropell Teacher Workshopを開催しました。Workshopでは、採点基準の解説や、受験者の生の声などを参考にした学習目標の設定、授業計画や実際の授業

でも活用できる参加型のアクティビティを行いました。Workshopでは、質問や意見も活発に飛び交うなど、参加した先生方も大いに興味を持ってくださったようです。また参加者同士の新たな交流の場として有意義な機会にもなりました。



8月3日武蔵野商工会議所会場でのWorkshop風景

## 2016年度 TOEIC® セミナーを開催

8月5日(金)、東京都千代田区のベルサール半蔵門において、2016年度TOEIC® セミナーを開催いたしました。TOEICセミナーは、学校の教職員、企業の人事担当者の方に向け、年に2回開催しています。今回のテーマは、「主体的な学びを引き出すTOEIC Programの活用 ~その先にある発信力の強化~」でした。はじめに早稲田大学商学部の森田彰教授と鈴木利彦教授、群馬県立女子大学国際コミュニケーション学部の細井洋伸教授に登壇いただき、大学におけるTOEIC® Testsの活用事例と、学生の主体的な学びを引き出すための仕組み、「話す」「書く」能力習得のための取り組みについてご講演いただきました。

次に、ETSのAlyssa Francis氏より、TOEIC S&Wの採点方法や実際のコミュニケーション場面を反映した“タスク”の紹介がありました。最後に、TOEIC Programを活用した英語指導法についてTOEIC® Propell Workshop Instructor 横川綾子氏より、TOEIC Speaking Testの“タスク”を基にした技能統合型授業実践の一例

として、学生4名が参加し、横川氏との模擬授業が行われました。

セミナーではTOEIC L&Rの活用事例とともに、TOEIC S&Wを使った実践的な授業アクティビティを通じて、両テストを活用した主体的な学びを引き出すための事例を登壇者より紹介していただきました。参加者からは、「TOEIC S&Wの評価基準、作成にあたっての意識がわかり、参考になった」「TOEIC Programを活用したカリキュラムなど、具体的な取り組みを詳しく知ることができた」などといった声をいただくことができ、満足度の高いセミナーとなりました。



TOEICセミナーの会場風景

## TOEIC® 公式教材セミナーを開催

8月5日(金)、東京都千代田区の東京ガーデンテラス紀尾井町にて、書店および取次会社の皆様をお招きして「TOEIC® 公式教材セミナー」を開催しました。書店・取次会社のご担当者を対象としたセミナーは今回が初めてでした。

TOEIC 公式教材シリーズは、テストを開発・制作するETSが、実際のテスト制作と同じプロセスで書き下ろし、リスニング音声も本番と同様のクオリティーでTOEIC® 公式ナレーターが担当した唯一の教材として、受験者に広く活用されています。

セミナーでは、IIBCより、TOEIC® Programの概要説明と公式教材の紹介があり、その後、来日したETSのElizabeth Ashmore氏より、テストの制作プロセスと公式教材の学習方法についての

レクチャーを行いました。

参加者からは、「ETSから問題作成のプロセスを詳しく聞くことができ、公式教材のクオリティーの高さをあらためて認識できた」、「公式教材使用者のアンケート結果は興味深いものだった」などの声をいただきました。



ETS Elizabeth Ashmore氏によるレクチャー

## JACETでSchmidgall氏(ETS)が講演 グローバルビジネスシーンで役立つ英語力を測る TOEIC® S&Wの活用法

9月1日から3日に札幌市の北星学園大学で「大学英語教育学会第55回国際大会」(一般社団法人大学英語教育学会(JACET)主催)が開催されました。同大会は、大学をはじめとする英語教員を対象に年に1度開催され、今年は「Special Symposium」でETSのJonathan Schmidgall氏が登壇しました。同氏は、ETSにおいてAssociate Research ScientistおよびTOEIC Research Coordinatorとして、主に英語能力をどう定義し、どのように測定するかというテーマで研究活動を行っています。当日は、「グローバルビジネスシーンで役立つ英語能力を測るTOEIC S&Wの活用法」について講演を行いました。プレゼンテーションには、IIBCからもR&D室長三橋峰夫が参加いたしました。

TOEIC Programは、グローバルビジネスで使用される英語力の測定、また、英語学習者や指導者にとっては受験者の英語習

熟度を測る適正な尺度として、世界の多くの人々に支持されています。その理由は、常に一貫した評価基準に基づくテストの信頼性です。

シンポジウムでは、「テストの重要な品質であるスコアの一貫性が、どのように実現されているか」を、TOEIC S&Wを例に挙げて、その採点基準や採点者の育成、採点する順番など、これまでの研究によって蓄積されたノウハウについて紹介しました。



JACETにて講演をした人に贈られるCertificateを持つ  
IIBC三橋峰夫(左)とETS Jonathan Schmidgall氏(右)



シンポジウムにおける講演の様子

### 【公式教材紹介】

#### 新形式問題に対応した公式教材新シリーズ

### 『公式TOEIC® Listening & Reading 問題集1』

新形式問題に対応した公式教材新シリーズとして、『公式TOEIC® Listening & Reading 問題集1』を10月13日(木)に発売しました。

本書は、TOEIC L&Rの開発・制作元であるETSが、実際のTOEIC L&Rの制作と同じプロセスで書き下ろした、新形式問題に対応した練習テストを2回分(計400問)収載しています。リスニングの音声もTOEIC®公式ナレーターが担当しており、本番同様のクオリティとなっています。また全パートに正答・誤答の解説、そして一部のパートには語句の解説や役立つフレーズの例文を掲載しており、より理解を深めていただける内容になっています。新形式問題に対応した公式教材としては、今年2月発売の『TOEICテスト公式問題集 新形式問題対応編』に続く2冊目で、TOEIC L&Rの受験準備に最適です。

#### 概要

【タイトル】『公式 TOEIC® Listening & Reading 問題集1』	【定価】 本体2,800円+税
【発行】 一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会	【発行日】 2016年10月13日
【体裁】 A4変型判 本誌112ページ 別冊『解答・解説』192ページ / 音声CD 2枚付き	



**IIBC** 世界は、あなたでつながる。  
一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会  
The Institute for International Business Communication  
TOEIC®公式サイト <http://www.toeic.or.jp>

#### 【お問い合わせ】

東京 東京都千代田区永田町2-14-2 山王グランドビル Tel. 03-5521-5901  
名古屋事業所 愛知県名古屋市中区錦2-4-3 錦パークビル Tel. 052-220-0282  
大阪事業所 大阪府大阪市中央区博労町3-6-1 御堂筋エスジービル Tel. 06-6258-0222  
【報道関係お問い合わせ】  
広報室 東京都千代田区永田町2-14-2 山王グランドビル Tel. 03-3581-4761